

# 戦争を描いた昔の隨意畫

新庄 よしこ

非常時の緊張は内にひそめて、この頃の幼稚園は、組々がそれ／＼殆んど平時の保育にたちかへつたように思はれる。斯うして、幾分落ちついて見れば、去年の十二月の半ば、南京へ南京へ、さうして陥落し、日本中の人民が血を涌かしたあの頃を思へば、日毎に幼稚園生活が、めざましい活躍を見せてゐたといふことが、今、いよ／＼はつきりして来たわけである。そして、この機會に當つて、戦ひを直映したさまざまの遊びや話、又は自在畫にあらはれた繪もいつたものにぶつかつて、はかrazも平時の保育には見られないなま／＼しい戦時に於ける保育をこの度経験したのである。

日露戦争の頃はみんなであつたらうかき、手近にあるこの雑誌の合本をさり出してそのころを探がして見たが、戦

争を詠んだ詩歌もか、兵隊さんの服はなぜカーキ色にしたかきか、ほしいと思ふ直接保育關係の記事はさらに見當らなかつた。けれども、ほんの僅な思ひ出の二三行や、少しばかりの繪なきの手が／＼りから、當時の幼稚園生活を覗いて見るこゝが出来て、やつぱり戦時に於いての保育は相當に行はれたのを知つたのであつた。たゞ、それをさり上げて問題にするといふ迄には、幼児教育そのものが、一般の關心になつてゐなかつた時代では無いかさういふこゝが想像されるだけである。こんな思ひ出の記がある。

一の組の時には日露戦争當時で、遊びはすべて戦争ごつこでございました。男のお子は、お山の上や、木の蔭なごで勇敢に戦はれ、女のお子は赤十字の腕章を巻いて負傷者の後送み看護を致しました。

この時定めて看護婦さんになつたき思はれるお嬢さんが、今、いゝお母さんになつて、これを書かれたのであつた。何の氣もなく読み過ぎてゐたのが、あらためて讀み返して見るに、なる程、この短い記事ではあるが、一つ一つが大きな内容を持つてゐて、われ／＼には思ひ當るこまばかりなのである。

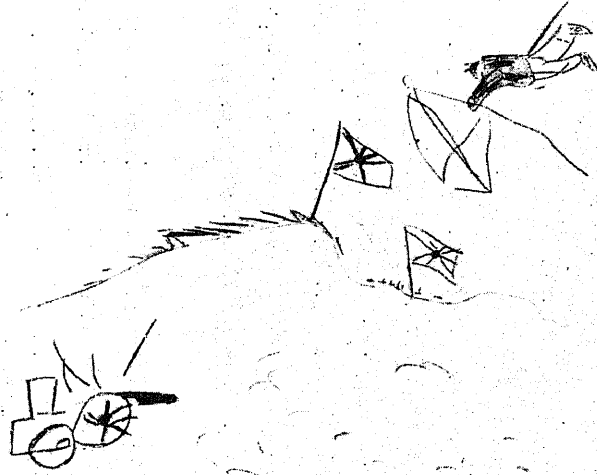
幸ひこゝに四五枚、戦争を描いた隨意畫が出て來た。日露戦争當時のものである。主事室の書庫に、ほんの少しばかりではあるが、蒐集した史料がはいつてゐる。その中に幼児の描いた戦争の繪が一枚あつたように記憶してゐたので、主事さんのお歸りになつたあき、大きなテーブルを占領し、紙片を一ぱいにひろげてこの一枚の繪を探した。こころが、はからずも一冊にまぢた幼児の隨意畫が出て來て、明治三十八年三月にある。あけて見るに戦争の繪であつた。探がしてゐた一枚も出て來て、これが明治二十六年に描いたものであるこまが、あきでわかつた。

出て來たこれ等の繪を見るに、三十幾年前の幼児に、時の日露戦争がきのように映つたであらうか、それをさう描

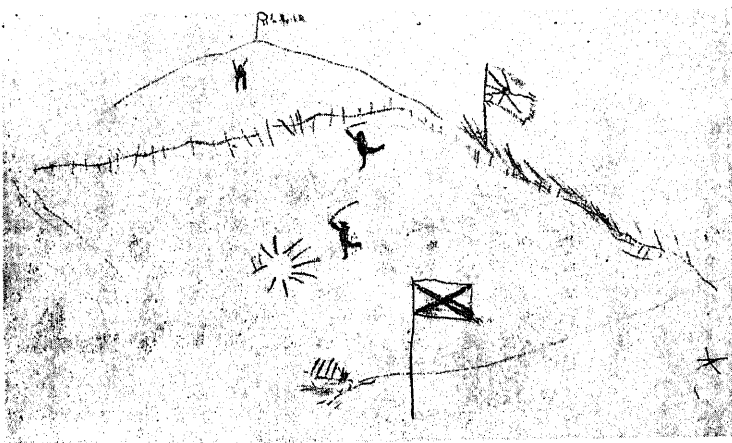
きあらはしてゐるか、その方面の様子がほゞ推察出来るものである。定めてまぢらの幼稚園の幼児もこの度の日支事變の多くの場面を、盛んに描いてゐるのを保姆さん方はいろ／＼の思ひで見られたこまを思ふ。時にまぢつて、それここれまぢ比べて見て頂きたいような氣がして、それに少しばかり解説めいたこまを付け加へて、お目にかけてみたいこまつたのである。

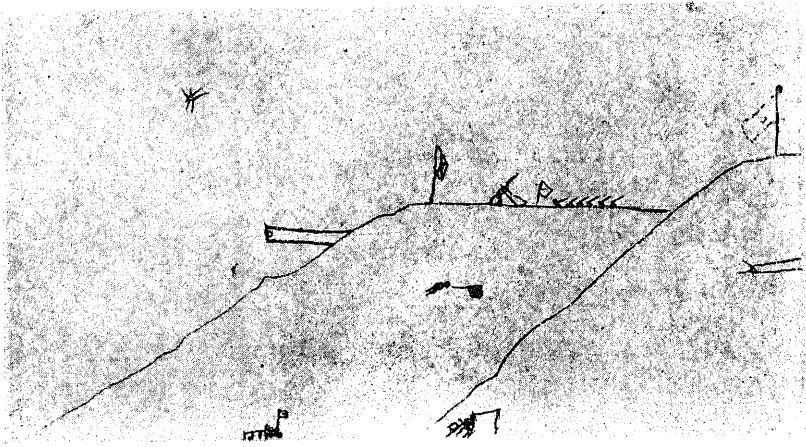
第一圖、第二圖共に奉天占領にある。ロシヤ旗を持つた兵士が、わが軍の打つた大砲で、大そう高く飛び上つてしまつた。敵兵が屹驚して飛び上るこまいふ觀念は、今度の繪にも度々見受けるこまで、氣の小さい憶病な動作を、敵兵にさせてゐるこころは、なか／＼鋭い神經を持つてゐる。第二圖では、手前の方がロシヤ、遙かに雙手を舉げて、占領を祝してゐるのが日本まぢは知れるが、中の二人はさてまぢらの兵士であらうか、拔劍して攻勢に出てゐるこころを見ればこれも日本軍のつもりらしい。第三圖は鐵嶺占領にある。たしかに平地での戦ひではない。日本軍が堂々ミ山の嶺を征服してゐるのに對して、哀れにも敵兵は中腹に俯

第 一 圖



第 二 圖



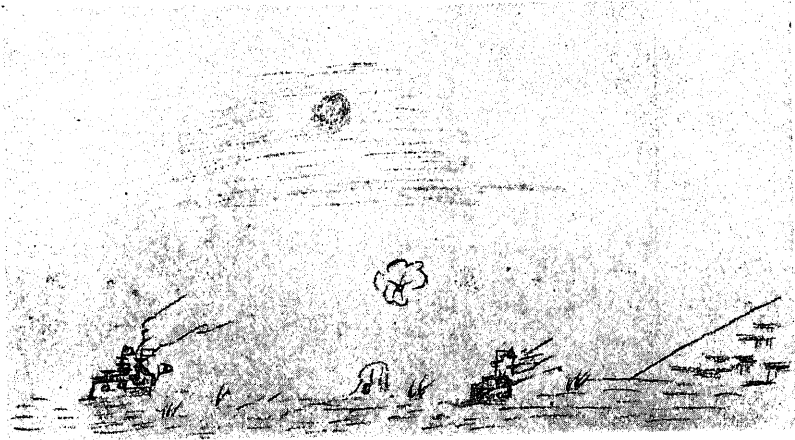


伏してゐる。

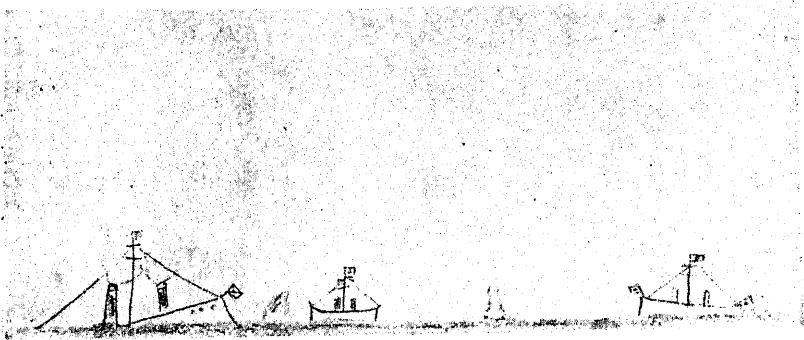
幼児の描く自在畫を見て居ていつもさう思ふ。或るこゝからの情景を描きあらはすさいふこゝはなかくむづかしいこ見える。單語の羅列はし易いが、センテンスになるこ一寸すらく出て來ないようなもので、人物だけ、飛行機だけ、戦車だけの單にその物の形は描き易いが、これが斯うして斯うなつてゐるこころさいふ圖は、描きながら相當心をはたらかせてゐるらしく、連絡關係さいふのはたやすくかけるものではないらしい。

その意味で、次の海戦の二圖もまここによく戦況をあらはしてゐる。書き方としては少々小さすぎるが、第四圖は月夜の海戦であつて、空中での彈丸の爆裂があざやかに見えるし、激戦の様子が、艦の走り方でそれ知られる。第五圖はいさゝか波靜かではあるが、左方、敵艦が、中ば沈みかけてゐるのが、なか／＼物を云つてゐる。この二つの圖のようなのは、今の幼児は決して描かない、南京占領なき、なか／＼見事な繪を描いてゐるので、ぢや今度は海軍のを一つかいて見て頂だいね、何か史料に藏つておきた

第 四 圖

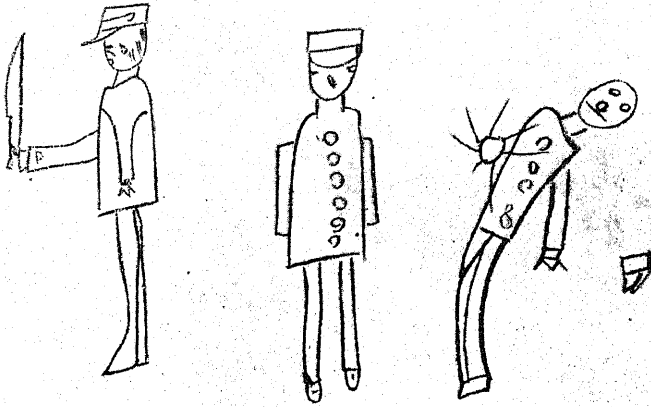


第 五 圖



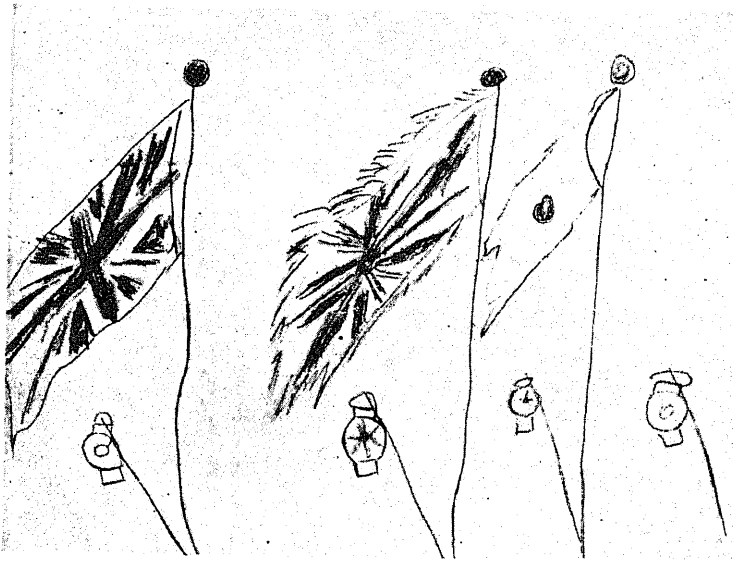
いしたごころから頼んでみた。  
私の頭がこの繪以上に古い上  
に、認識不足いふわけで、す  
ぐ日本海海戦の圖柄を豫想して  
しまふ、するにそんなのは誰も  
描かない、空中戦で、今、海軍  
機から爆弾が落ちかゝつてゐる  
ミカ、或は鐵兜に錨をつけて、  
それをかぶつた陸戦隊を描く、  
軍艦にしても、うっかり既成觀  
念から、あら、マストがもつゝ高  
くなくつちやなぎゝ云ふに、そ  
んなのないよき、一蹴されてし  
まふ。なる程海軍の戦の觀念は  
すつかり變つてしまつてゐる。  
陸軍のこゝでも、幼児の方がよ  
つぽき現代を知つてゐて、時々  
教へて貰つてゐる。

第 六 圖



第六圖が出て来た時は思はず笑つてしまつた。子供のころがそつくり出てゐるではないか、三人仲よく並んでゐるが、右方の弾丸に當つて倒れかゝつてゐるのは敵兵らしい。左方のは、きつミ大將だネミこれを見せた幼児が云つてゐるが、そのつもりかも知れない。二人の平然とした表情に比して、なんミ残念そうな口もミであらうか。

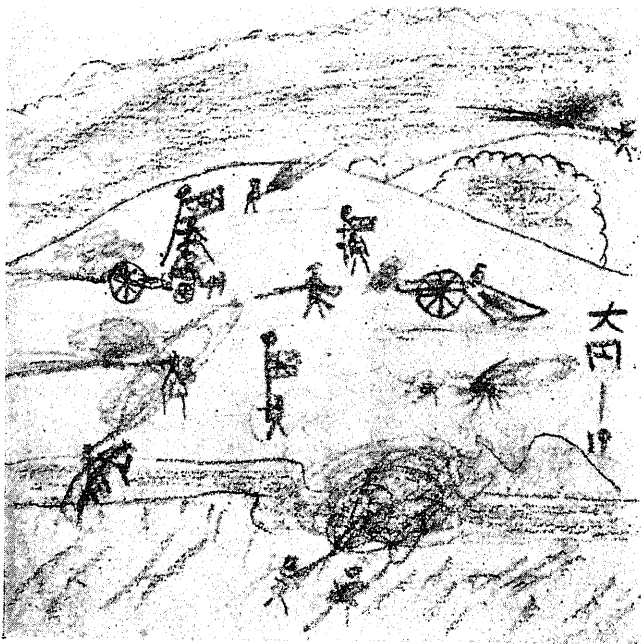
第七圖は旗行列ミ提灯行列を一緒に描いてあるが、何れにしても戦捷奉祝の氣が一ぱいに漲つてゐる。三十八年のお正月は難攻不落の旅順が見事陥落して、日本中は二重のお祝ひをしたものだ。今は時間が來ればニュースで戦況を知るミ云つたかたちであるが、その頃は、何でもかでも號外で、この呼び聲ミ鈴の音は相當人々の心をかき立てたから、何々陥落の號外のたんび小踊りして喜んだ。その興奮が旗行列提灯行列ミなつて、今ミは違つて、東京市ミいつてもずつミ狭かつたから、市中至る所に提灯や旗が溢れるようであつた。それは幼児への印象も深かつたに違ひない。今のナチス旗伊太利旗に代つて、英國旗が翻つてゐるのも時代柄で、明治三十五年の日英同盟後は何でもかんで



も英國ばやりであつたことが思ひ出される。

國旗さいへば、是等の繪にはロシアの旗がきつみ出てる。今度はあんまり旗を問題にしてゐない、この頃になつて漸く一二これを見出す位である。われ／＼でもよく確めて見なければわからないさいふような旗では幼児が自在畫に描く筈もなく、幼い頃からその國家觀念を養ふ上に、國旗が知らず／＼みんな役目をしてゐるか、如實に物語つてゐると思つた。

さて以上は、圖らずも見出した隨意畫が、時も時、かうして世に出た面白さに、つい長々書いたわけであるが、かねてから私の記憶にあつたさいふのが次の一枚である。實物を見るに、「大円しゆ」を書いてあるから大演習の實況を描いたと思へる。筆者が解つたので、早速電話で尋ねて見たら、しばらく考へたあとで、そうですね、私は明治二十六年にたしか幼稚園でお世話になりましたから、その時のものでせうと思つてゐられた。戦争の描寫ではないが、この小さな紙片の中に、山又山を向ふにして、川あり草原あり、十幾名の兵士がそれ／＼の部で活躍し、なか／＼複雑な場



面を描いてゐる。これを描いた幼児が、今某有名紙店の主であつて見れば、その頃軍もの繪草紙なまが店に多かつ

たであらう、もごく上手な上にそれ等の影響もあつて、

こんなに巧みに描けたのであらうかとも思つて見た。

これが明治二十七八年筆であつたらば、私にまつては申分ないこゝになるが、それは兎に角一年後には戦争になつてゐる。若しこの筆者がそれを描いたなら、やつぱり斯うした圖柄になるのではあるまいかと思像してみた。

こゝへ今の幼児が描いたものを持つてくれば、對比に一層興味も出てくるわけであるが、まだこの渦の中にある、打ち切りさいふわけでも無い、それを代表作としてこゝへ送り出してよいか選擇にも迷ふ次第で、止めてしまつた。たゞ折々に見せてくれる描寫の中からこれは思ふものはより纏めて、この時代を語る史料に藏つておく事だけは、この時に遇つた保姆のせめてもの務まして行つてゐる。

ほんまうはこの昔の隨意畫をお目にかけてさへすればそれでいゝのであつた。さうぞ今の幼児の描く自在畫と思ひ合せて、これらをよく見て頂きたい。